

Title	序
Author(s)	大木, 英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.16, 2000.2 : 3-4
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3453
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

序

聖学院大学総合研究所長 大木英夫

本号は、本年度の研究の研究活動をまとめたものであると同時に、本研究所の性格をかなりよく示しているものである。市民社会の研究における継続的深化と国際的交流の推進があり、さらに、グローバリゼーションの文脈における日本文化研究プログラムの本学教授の研究発表は、本学日本文化学科の特徴を示している。また、福祉社会形成に取り組む注目に値する貴重な二つの論文が入っている。加えて若い研究者の仕事としてジョン・ロックの『コリント人への第一の手紙注解』（上）の翻訳、研究発表、それに大学院生の修士論文二点も含まれている。

本研究所の取り組みは、現代社会の問題をその深みから捉えて行くという研究姿勢を持しているが、その推進の中で、市民社会の研究、近代デモクラシーの思想と制度、そのキリスト教的背景の研究、医療や福祉に関する研究、日本の文化的倫理的遺産の研究が、互いに深く絡み合っ互に結びつくものであることを徐々に知るようになったという結果を見ている。これは本研究所の研究の経過の副産物と言うべきか、それともそれこそ主要な成果と言うべきか、とにかくそれが本研究所のまた

研究活動の内的なインテグレーションとなつて、特徴となつて行くように予感される。

ここで、二つのこと——一つは感謝したいこと、もうひとつは記憶にとどめておきたいこと——を記させて頂きたい。感謝したいことは、標宮子教授の「加藤仁平著『和魂漢才説』をめぐつて」である。拙著『宇魂和才の説』でも言及したが、『和魂漢才説』は失われてはならない優れた研究書であり、それによつて「和魂洋才」なる思想の問題性を知る不可欠のものであることを、わたしは標教授から教えられた。

記憶にとどめておきたいもう一つのこととは、市川昇判事の二つの文章である。市川判事は、阿久戸助教授の友人で、クリスチャン法律家であり、またすぐれた判例研究者でもあつた。四十九歳で癌で亡くなられた。岡山に転任される前は、本研究所の研究会によく出席されていた。惜しむべき人であつた。最近では、元ヴァチカン大使で本研究所教授であられた荒木忠男教授がなくなつた。これまた惜しい人をうしなつた。人生に、よろこびもあり、またかなしみもある。本研究所で、その人生の問題を無視することはない。本研究所で取り組んでいる問題は、深く人生の問題と結びついているからである。無視したら、その研究は、軽薄なものとなるのではないかと思う。